

13. (とりあえずの) まとめ ver. 2026

菊地暁 folklore.lecture@gmail.com

＝バラ色の二一世紀？＝

- ・ベルリンの壁崩壊（1989）、ソ連解体（1991）、バブル景気（1986～91）、オウム&阪神淡路大震災（1995）
- ・同時多発テロ（2001. 9. 11）、リーマンショック（2008）、東日本大震災（2011. 3. 11）
- ・「安保法制」（2015. 9）、コロナ禍（2020～2023. 5）
- ・自然災害／インフラ崩壊／格差拡大／AI台頭／法治崩壊…

＝柳田国男（1875-1962）の敗戦後＝

- ・『炭焼日記』1945. 8. 11「いよいよ働かねばならぬ世になりぬ」
- ・「日本人の予言力は既に試験せられ、全部が落第といふことにもう決定したのである」（「窓の灯」『祭日考』小山書店、1946）
- ・「歴史教育の使命：『くにのあゆみ』に寄す」（『毎日新聞』1946. 10. 28）
「もともと歴史とは私たちの過去の経験であり、これによって現代を解釈、批判し、よりよき将来を計画しうることが歴史教育の目的なのであって、今回の如き大いなる反省の機会に際会した現在、われわれはあらゆる方法を試みるべきではなかろうか。[…] 事ある毎に判断の基礎を正しい過去の知識に求めるような気持を養成することが、歴史教育の眼目である」
- ・『日本の社会』（実業之日本社、1954）
「私たちは自分でよく考えて、みんなの幸福のために、まじめに努力してくれるようになりつばな人に、すすんで投票しなければなりません。そして自分たちのえらんだ人が、みんなの幸福と正義とのために、ほんとうに働いているかどうか、また選挙のときにやくそくしたことをはたすために努力しているかどうかを、よく気をつけていなければなりません。とりわけ、国会議員の選挙は大切です。正しい選挙が行われるためには、国民の一人一人が、ものごとを正しく判断できる力を、身につけるようにつとめなければなりません」
- ・「我々は公民として病み且つ貧しいのであつた」（『明治大正史世相篇』朝日新聞社 1931）

＝「普通の暮らし」をあきらめないために＝

- ・「選択と集中」を越えて
- ・ささやかな欲望の連鎖する日々の暮らし
- ・欲望を産み出し届けてくれる存在との連帯／欲望を否定するプロパガンダへの注意
- ・私たち一人一人の「いま・ここ」から、誰かの「いま・ここ」や「かつて・あそこ」へ

＝文献＝

菊地暁『民俗学入門』（岩波新書 2022）

菊地暁編『書いてみた生活史：学生とつくる民俗学』（実生社 2024）

菊地暁『柳田国男と民俗学の近代：奥能登のアエノコトの二十世紀』（岩波現代文庫 2025 [初出 2001]）

歴史教育の使命 『くにのあゆみ』に寄す

新教科書を通覧すると、固有名詞や年代を思ひ切つて少くしたのみならず、かなりの改良、苦心のあとがみられ、よくこれだけ書けたものだと思つたのだが、私は元来、教科書なしで歴史を教へてはどうかと思つてゐる。そして、また上代から今に及ぼすこれまでの説き方をやめて、現在から過去へ遡る歴史をわれ／＼は書かうとしてゐるのである。

もと／＼歴史とはわれ／＼の過去の経験であり、これによつて現代を解釈、批判し、よりよき将来を計画しうるものが歴史教育の目的なのであつて、今回の如き大いなる反省の機会に際会した現在、われ／＼はあらゆる方法を試みるべきではなからうか。教科書無しでは教員諸君は大いに困却するであらうが、この教科書の上に縋りつかれては甚だ困るのである。生徒の八割までは、これだけの知識をもつて世の中へ出てしまふのであつて、これだけを教へれば歴史教育は済んだのだといふ如き錯覚に陥ることだけは、今後は絶対にやめねばならない。教科書に書いてあるのは、ほんの要項に過ぎず、決して歴史の全部ではない。生徒達が大きくなつた後までも、事ある毎に判断の基礎を正しい過去の知識に求めるやうな氣

反対はなく、江戸幕府以降に全体の半分を割いてゐる態度には大いに賛成である。今まで上代史ばかり研究してゐた歴史家には氣の毒だが、われ／＼の近代生活の夜明けは、実は応仁の乱あたりから始つてゐるのであるから、近世史には、もつと頁をとつてもよいのであり、多くの疑問も実は、近世史に含まれてゐるのである。文部省は、これを永久不変の教科書にしようとしてゐるかもしれないが、何度でも改訂せねばならぬものであり、また民間から、国定教科書と競争せんとするものが輩出し、優れた歴史家が国民教科書を出すことも奨励してよい。

最後にもう一つ、この教科書の利用者にすゝめたいことは、生徒達の発する純なる疑問を集大成、整理して、この次の編纂への基礎材料とする仕事である。先生は全智全能の如く信じてゐる生徒に『それはまだ解らぬ、それは先生も知らぬ』と白状することは、かなり勇氣を要するではあらうが、知らぬを知らぬといひ、率直なる疑問を提出する人の一人でも多くなることで、学問成長の第一歩にはかならない。生徒達は彼等にあふさしい数々の疑問を持つてゐるのであるから、これらの疑問を各校毎に何年間か集めて、その統計を作製し、今回のこの、初期の実験の恩恵を後世に譲ることとしたい。『つまらぬ事をきくな』等と、自然、率直な成長の芽生を押へつけて誤魔化さずに『それは大変いゝ質問だが、まだ専門

持を養成することが、歴史教育の眼目である。

明治廿年代に、東大史学科の教科書用として出版された「国史眼」は、真にエポック・メイキングな官撰国史の一つであるが、本文の傍に沢山の黒と白の○印がつけられてあつて、白印は大抵信じてよいもの、黒印は現在までの材料では、かう解釈するほかないが、さき行き変わるかもしれないところ、註がついてゐる。他の学問も同様だが、史学は殊に現在成長しつゝある学問であり、この態度を機会ある毎に生徒に深く印象づけることに努力してゆきたい。旧式史学が、明治以降今回まで、何等の進歩発展もなく、新しい発見も、本も出てゐないことは驚くべきものである。一般の需要のまるでない内容の史学が、年代と固有名詞の暗記学であり、検定のための学問に過ぎず、また試験の最大難物であるほかは、興味のまるでないものであつたのだから、その衰へは当然の結果であつた。今後の歴史科は、無試験にして、たゞ聴いてゐて、疑問を書き止める程度にしたいものである。同時にまた、教科書に載つてゐること、学校で教へることは、国の歴史のほんの片端にしか過ぎず、例へば、万人が必ず一生のうちに経験し、悩み考へねばならぬ婚姻や誕生、葬制の歴史は勿論のこと、生活の根本問題たる衣食住のことなど殆ど記載されてをらぬことを教へねばならない。

「くにのあゆみ」に挙げてある教授要項については、それ程

の学者も解つてゐないのだから、君達が大人になつて研究するといふね」といふ風に育てて行きたい。教育の真の目的は、よき疑問を起させるにあるといつても過言ではなく、国民生活の要求の上に立たぬ史学は、有害無益なる遊びの学に過ぎない。

従来は、外国史同様、自分の国の歴史を、まるで縁のない遠いものの如く感じさせて来たが、歴史の結末は、自分と国との関係、幽かなものと国との関係になければならず、最後を太平洋戦争においたのは一時凌ぎに過ぎないであらう。更に進んで、個々人と世界との関係を教へる学問は、歴史教育以外にないことに想ひを到すべきである。現在のものが決して最上のものではないといふ断定は、学問の未来に希望を持つことなのであり、決して悲しむべきことではない。(談)

『毎日新聞』昭和二十一年一〇月二八日、毎日新聞社

山帽子

私はまだ引続いて、木や鳥の名の変遷を考へて居る。昭和八九年の頃、三越の六階から苗木を買ひ求めて、外庭のほどこに栽ゑて置いたヤマボウシが、二丈ほどに成長して花が咲